

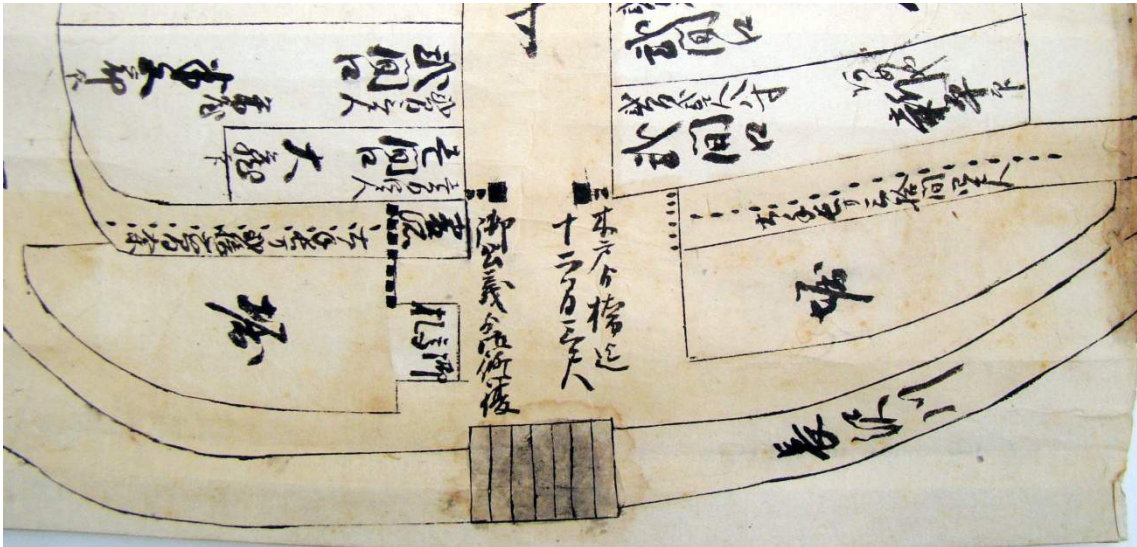
## 城下町探訪 25

2009/9/17

# 長沢川と袖留橋

### (1) 江戸時代は長沢川橋・袖留橋とよばれていた

博労町と本町五丁目の間を流れる川が長沢川である。この川にかかる橋が袖留橋そでとめぼしあるいは長沢川橋である。現在は緑橋と名前を変えている。



「元禄九年 本町町並絵図面より」(寺島文書)

長沢川は薄川の支流で北小松から別れて埋橋を通り西流して田川に入る川である。明治9年の「長野県町村誌南信編」によれば、水深2尺、川幅広いところで6間(約11m)、狭い所で3間(約5.5m)としている。「信府統記」はこの川にかかる橋を「長沢川橋」と記し長さ3間1尺(約6m)とある。

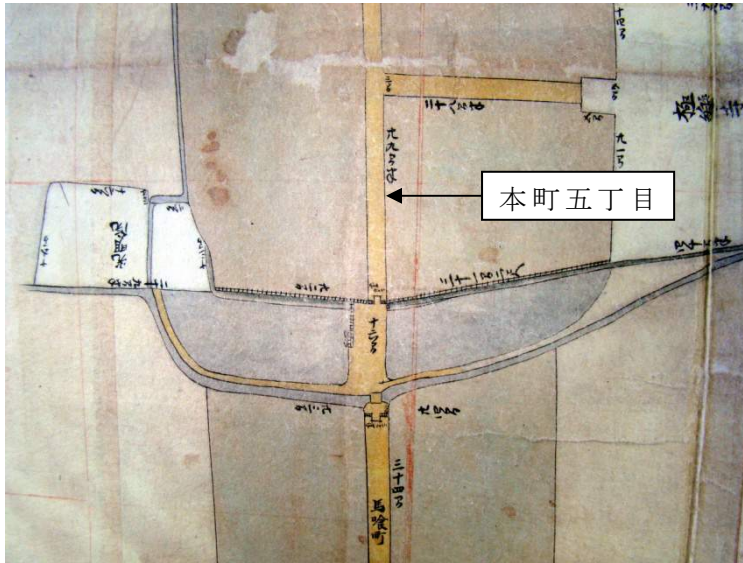
この橋は明治9年頃、長沢橋と呼ばれていた。明治11年この橋が松本城南大手門の門台の石を再利用して石橋に掛け替えられ、それを期に「緑橋」と名付けられた。

### (2) 袖留橋伝説

昭和8年刊の松本市史は地名伝説「袖留池」を載せている。それによれば「緑橋はいにしえ袖留橋と称え、この橋の前後は川幅が広く、川の水はよどみ池の形をなしていた。これを「袖留池」と呼んでいた。その由来は「元和元年大坂夏の陣に、松本城主小笠原秀政が二子忠脩・忠政ただながを伴って出陣している。時に忠政まだ大学助といい、弱冠のみずみずしい若武者で振り袖姿なり、乳母別れを惜しみ、後を追ってこの所に至り、袖にすがり離さず、大学助もさすがにうしろ髪を引かれる思いでしばらくはそのままだが、やがて、両の袖を振りきって立ち、袖は乳母の手に残った。これより橋と池の名に袖留を冠するようになったという。

但し、この池は石川時代松本城を築いたときに、前後40～50間だけ堀幅を広げ要害

となしたるものなり。」と記している。



「東筑摩郡・松本市・塩尻市誌現代下」は袖留橋伝説を「・・・水のほとりに乳母と若君の伝説が残ることは古い母子神の信仰を伝えるものであろう」と分析しています。

母子神信仰の一つに「うば神」があり、子供を育てる乳母や母を祭る信仰です。各地の伝説では水に関係することが多く、地名でも「乳母が池」「姥

が淵」等と呼ばれるところが伝説を伝えているそうです。京都丹後地方に伝わる乳母が淵伝説は、誤って殿様の子を淵に落とした乳母が投身したところと伝えられているそうです。本来水辺に住む巫女が大神の子を産み育てるといふ信仰が元にあったといわれています。

すなわち松本の長沢川付近にも古い母子神信仰があってそれに小笠原忠政と乳母の話が重ねられて発生した伝説ということになるのではないかと思います。

### (3) 長沢川は松本城防衛ラインの一つ

松本城築城にあたり南側の備えは出川橋で田川を渡り、博労町南入口で薄川を渡りさらに、本町入り口で長沢川を渡る。本町を北進すれば女鳥羽川にぶつかり、その北側に総堀が掘られているというふうに、川という天然の防衛ラインを幾重にも利用していることは確かです。上の写真は享保13年秋改め図ですが博労町と本町五丁目の間に堀が作られ高札場のある所の堀幅は16間（約29m）とありますから、いざというときに南からの敵の攻撃をくい止める拠点であったことは確かです。

明治9年頃の「南深志町図」には長沢橋の下を流れる長沢川に「袖トメホリ」と書き込みがされています。

### (4) 「袖留橋」の名を残す

明治11年南大手門も門台の石を再利用して作られた橋は「緑橋・美登利はし」と名付けられました。「旧松本市史下の947p」には「大正末年、巾上新道開設の時、この末流たる同川長澤川に架したる小橋を袖留橋と命じ、その名残を存したることうれし。」とある

すなわち明治11年長沢橋あるいは袖留橋といわれてきた橋が緑橋と名付けられたため、由緒ある袖留橋の名前を留めようと巾上新道が長沢川を渡る所に架けた橋に袖留橋と名前をつけたという。「旧松本市史下」の筆者はそのことを「うれし」と表現している。

白板橋を渡り南進し松本駅西口を左に見て長沢川を渡るがその橋が上記の様な経過で作られた袖留橋である。

緑橋（江戸時代は長沢川橋とか袖留橋と呼ばれた）



緑橋



現在の長沢川（極楽寺南）

巾上新道開通のときに長沢川に架けられた袖留橋。

平成 17 年松本駅西口整備に伴い架けかえられた。

手前が  
東側



長沢川は田川大橋の少し南で田川に合流する。